

令和 6 年 12 月定例仙台市社会教育委員の会議 会議録

- 日 時 令和 6 年 12 月 6 日（金）10：05～11：55
- 場 所 仙台市役所上杉分庁舎 12 階教育局第 1 会議室
- 出席委員 阿部哲也委員，安藤直美委員，泉山靖人委員，齋藤愛委員，高橋美和委員，
内藤良介委員，中山慎也委員，沼里理恵委員，朴賢淑委員，松本大委員，
若生彩委員（11 名出席）
- 事務局職員 伊勢生涯学習部長，小幡生涯学習課長，加藤生涯学習課主幹，三澤生涯学習
課企画係長，菊池生涯学習課施設係長，生涯学習課生涯学習係 金光寺主
査，間宮主査，生涯学習課企画係 松澤主事

○会議の概要

1 開会

2 挨拶（松本委員長）

3 協議事項

（1）調査の進捗状況について

調査の進捗状況について，各グループより下記のとおり報告があった。調査先や実施日時については資料 3，調査項目については資料 4 のとおり。

〔「地域における子どもの学びと居場所」グループより報告〕

①NPO 法人ワンダーアート

- ・アートを通じて社会に潤いと改善をもたらし，共生社会につなげるため，美術教育普及事業，ホスピタルアート活動，アートコミュニケーション活動，被災地の応援活動，障害のある人とその兄弟児，家族の居場所「Wonder Art Studio」，就労継続支援 B 型事業所「Wonder Workers」の運営等を行っている。
- ・東京で活動していたが，東日本大震災時に仙台でも活動を開始。現在は荒町で活動している。
- ・「Wonder Art Studio」は満席の状態で，ハンデの有無にかかわらずそこをよい場所だと思っている方々が集まっている。
- ・団体の持続や後継者に関することが一番の課題。
- ・ボーダーのない活動をしているからこそ，制度に当てはまらず助成が取りにくい。
- ・もともと東京で活動していたこともあり，仙台でのネットワークが弱い。行政や企業との連携も課題の一つ。荒町商店街とは連携している。
- ・広報に特別力を入れたり，募集をかけたりしているわけではなく，放課後等デイサービスや展覧会で存在を知り，やって来る方が多い。

②NPO 法人アスイク

- ・東日本大震災直後に，避難所における学習支援から出発した。
- ・子どもたちや若者が必要としているものを提供したり，所得にかかわらず幼少期から子どもと保護者の生活基盤を支えたりするため，学習支援や居場所づくり，保育園・児童館の運営等多様な事業を行っている。
- ・「子ども・若者と社会をつなぎ，共助・公助を増やしつづける」ことを役割とし，

- 「どんな困難にぶつかっても、自分の人生を好きになれる社会」を目指している。
- ・行動原則として、「対等なパートナーシップ」や、子どもたち、保護者等の「当事者たちから学ぶ」ということを大切にしている。単なる支援ではなく、同じ立場で目線を合わせて支援することを重視していて、動き続けるなかで必要なものが見えてきたら、それに対応する事業や活動を増やしていくという考え方も大切にしている。
 - ・コロナ禍におけるオンライン活動等をきっかけに事業展開が広がった。
 - ・人材確保、特に中間管理職等リーダー的な役割を担う人の確保が課題。
 - ・教育に関して、不登校が近年急増しているが、様々な要因が複合しており、カテゴリ分けしての対応ではなく、個々の状況を見ながら対応することが必要。
 - ・「子どもの学ぶ喜びや居場所」に関し、団体として大事にしていることは、価値観の統一や利用者だけではなくスタッフも楽しめるような環境づくり等。また、気軽に利用できるようなイメージづくりやプライバシーの保護に留意している。
 - ・ニーズの把握のため、情報収集の点で行政や学校とさらに連携していきたい。学習支援の場も足りていないため、場所を使わせてくれるところを探している。
 - ・参加者の募集については、LINE での登録が最近増えている。保護者等からつながるケースも多い。
 - ・団体の展望として、現場のニーズを大切にし声を拾っていくとともに、地域に根ざし、新しい形の居場所を模索したいと考えている。
 - ・人材は単に集めるのではなく、理念に共感してもらえるかということを重視している。
 - ・小中学生のうちにつくった関係をうまく維持し、切れ目のない支援を行っていきたいと考えている。
 - ・プログラムを与えるのではなく、子どもたちに何をやりたいか選ばせたり、フィードバックしたりすることを重視している。

〔「外国にルーツを持つ子どもの学びと居場所」グループより報告〕

①外国人の子ども・サポートの会

- ・2005 年から活動開始。代表を中心に広いネットワークができています。
- ・多くのボランティアが支えていて、子どもたちに1対1の学習サポートを行っています。
- ・仙台市では、近年（コロナ後）特に東南アジア、南アジアの国々からの就労者が増えている。
- ・宮城県では一定の年齢を超えて来日した子どもは義務教育課程を終えているという扱いになってしまい、以降の学びの場につながれないことが課題。また、親の教育観、子育て観が国によってばらばらであり、統一的な支援が難しい部分もある。
- ・支援を受けたい子どもと支援者のマッチングに気をつけていて、単に日本語を教えるということではなく、家族も含めてサポートする必要がある。
- ・同じ国の出身どうしでのつながりが薄いことも課題であり、ママ友等のネットワークづくりや、子育ての相談をすることも難しい状況がある。
- ・日本語に限らず、自力で学ぶ基礎力を育てたり、子どもが持っている力を引き出し

たりすることを大事にしていきたいと考えている。

- ・学校との連携は欠かせず、学区単位で多文化共生を進めていく取組が必要。
- ・後継者の育成が課題。
- ・アエル 28 階（エル・ソーラ）の市民交流・図書資料スペースで活動している。そのスペースは子どもたちや支援者の居場所になっている。子どもたちは勉強しながら周りの人を観察していて、そこから学ぶこともある。

②仙台観光国際協会（SenTIA）

- ・仙台市の指導協力者制度は利用できる回数が限られているため、支援が不足している部分がある。
- ・中学生以上になると、受験の支援も必要になる。将来にもつながることなので、そのサポートの負担は大きい。
- ・指導協力者は元教員が多いが、仕事の範囲が曖昧で、個々の事情も深く、負担が大きい。
- ・指導協力者をサポートするコーディネーターと呼ばれる方も大きな役割を果たしている。負担も大きいので、育成が難しい。教育現場を経験した方を発掘していくことが大事だと考えている。
- ・発達等、日本語以外にも問題を抱えている子どもが増加していて、個々の案件に対応するのが大変な部分がある。
- ・進路ガイダンスを行い、今後仙台でどういう教育を受けられるか、どういう進路があるかということを伝えている。夏休み教室や、小学校入学準備講座も実施している。国ごとに人との関わり方や求めるものが異なり、全員で仲良くすることが難しい場合もあるので、年に数回イベントを実施することでつながりをつくっている。
- ・就労のために来日している保護者の日本語力を上げていく必要がある。
- ・他団体と連携をとっていくことも必要。
- ・図書館ともつながりをつくり、居場所にしていくような関わり方もしたいと考えている。
- ・様々な要望があるため、どのようなスキルを持った人に支援に入ってもらうのがよいのかしっかりと固まっていないところがある。
- ・以前は比較的短期で帰国することを想定してサポートしていたが、最近は長期滞在を念頭に置いたサポートの必要性が増している。
- ・協会の資料室ではなかなか新しいものを提供できないことが課題の一つ。

（２）提言の内容について

調査等を踏まえ、資料５の項目に沿って各グループで意見交換を行い、内容を発表した。

前回リーダーを仮決定としていた「地域における子どもの学びと居場所」グループにおいては、改めてリーダーの選出を行い、内藤委員に決定した。

〔「地域における子どもの学びと居場所」グループより発表〕

内藤委員 １の「子どもをとりまく社会教育」という点における問題や課題について

ては、資金面を含めて行政や企業、地域との連携の取り方というものが一つ。スタッフや後継者の育成も大事な課題。参加者・利用者のプライバシー保護や、情報の管理の問題もしっかりしていかなければならないという話があった。うまくいっている事例については、子どもたちにやりたいことを選ばせることで、興味を持って楽しんで活動してくれる場になっているということがあったかと思う。これを踏まえて、社会教育が果たす役割としては、情報発信や運営資金、場所の問題をどのようにサポートしていきけるのかということ。また、団体が続いていくための人材育成のサポートや、やりたいことをどうしたら実現できるのか、ニーズを聴きながらサポートできるとよいのではないか。

3の提言をまとめるにあたってのキーワード等については、人材育成や情報発信の仕方、安心感の持てる環境といったものがキーワードになってくるのかなと思う。4の留意すべきこと、検討すべきことについては、個々に書いていただいたので補足があればお願いしたい。

中山委員

提言を支援対象者が目にすることがあるかもしれないので、資料を含め書き方に気を付けなければならないのではないかな。また、今回のテーマとなっている「子ども」について、どちらかというと要支援の子どもたちが中心になってきているので、もしかするとテーマあるいは副題が変わってくるのかもしれないと思った。今後、調査先が愛子スポーツ少年団からろりばっく小学校に切り替わるとすると尚更。

松本委員長

プライバシー等に関し、表現に気を付ける必要があるということと、対象となる子どもに沿ったテーマ設定を考える必要が出てくるのではないかなというご意見。その他、情報、安心、人材といったキーワードや、資金面での支援が重要ではないかという内容を発表いただいた。

〔「外国にルーツを持つ子どもの学びと居場所」グループより発表〕

泉山委員

うまくいっている事例としては、外国人の子ども・サポートの会においてオープンスペースがうまく機能していること。費用をかけずに、子どもも含めて集まりやすい場所があることが意味を持つのではないかな。

社会教育がどんなことをできるのかというところでは、参加の第一歩をどのように踏み出させるのか。これまで日本語を勉強する場に来ていない人に来てもらったり、外国にルーツのある人、あるいはいろんな人が一緒に集まったりする場合にどのように誘導していくのか。どのようなことが大変で、それをどうカバーしていくのかということが、社会教育としてできることのひとつではないかな。市民センター等の社会教育の場において、そういう仕掛けづくりというものが、もしかすると以前に比べて弱まっているのではないかなという意見も出た。

キーワードとしてはまず知ること。お互いや、仙台あるいは宮城という土地を知ることが重要になってくると思う。そしてそれを通して、

団体等をつなぎ、混ぜる。あるいは、いろんな人が一緒に活動する場をつくっていく。そこでは対等性が必要となる。さらに、これまでは支援の対象として見られていた外国にルーツを持つ人たちが、支援の主体となるような発想や見方の転換が必要になってくるのではないかという話があった。

今後の留意点について、先ほどの市民センター等社会教育施設の仕掛けが弱いのではないかというところは印象論であり、正確に把握しているわけではないので、実態を把握していかなければいけないという話をした。

松本委員長 オープンスペースの機能については、地域グループの「やりたいことができる場が必要」というところと関連してくると思う。

参加の仕掛けづくりが課題であるということや、つながる、混ぜるということ、発想や視点の転換が必要だということは外国グループ独自の視点。

キーワードとして挙げた「知る」とか「情報」というところが両グループに共通しているのかと思う。

それでは、今回報告いただいたことも含め、調査で聞き取った内容について調査票にまとめ、12月20日までにご提出いただきたい。

他にご意見等なければ、本日の議事は以上となる。

4 その他

委員長より、今後の進め方について説明があった。

5 閉会

「仙台市社会教育委員の会議実施要領」第4条及び第5条に基づき会議録を作成し、同要領第6条に基づき委員長及び会議録署名人が署名する。

令和 7 年 2 月 10 日

委員長（署名欄）

松本 太

署名委員（署名欄）

高橋 美和